



営農情報

第86号 令和元年8月6日

「あまおう」8月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は令和元年7月18日現在の登録資料に基づいて作成されています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

現在の苗の状況と気象の経過

【生育概況】

梅雨明けが平年より遅く、軟弱徒長ぎみの苗が見受けられます。また、7月下旬の大雨やその後の高温の影響により、根傷みの発生が懸念されます。

【病害虫発生状況】

7月中旬頃より炭そ病が散見されています。また、7月上旬にカキノヒメヨコバイによる被害の発生が多く見られました。ハダニ類やアブラムシ類の発生も見られています。

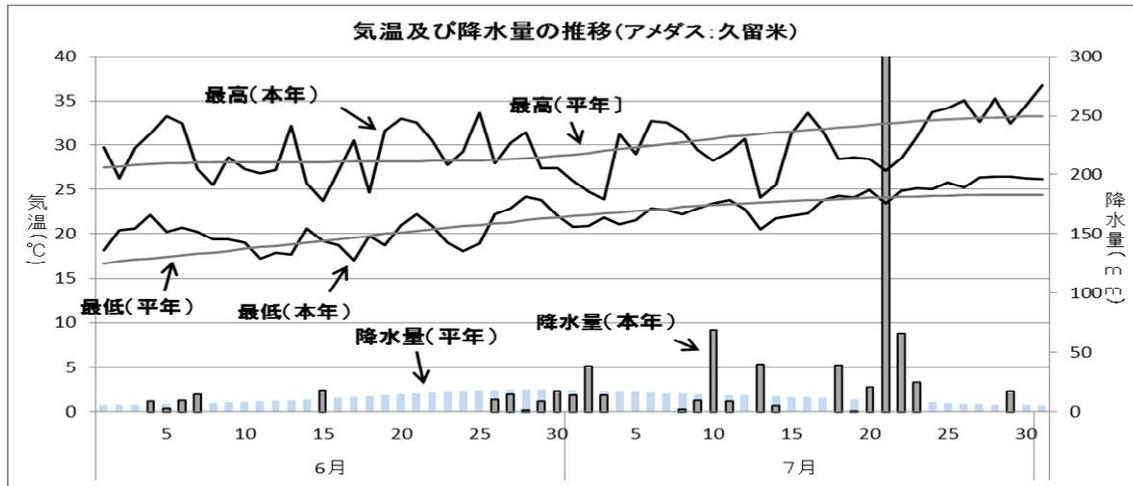


図1 気温及び降水量の推移 (アメダス久留米より)

気象予報と今後の見通し

【気象予報】

福岡管区气象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

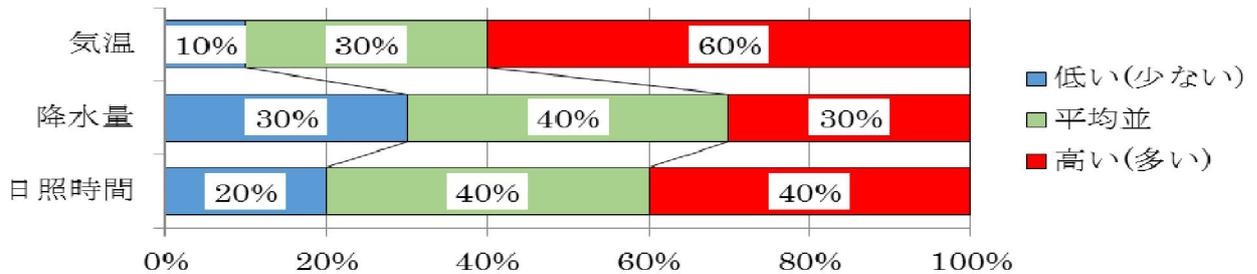


図2 1か月予報 (予報期間: 8月3日~9月2日 発表日8月1日)

【今後の見通し】

気温は平年より高く、平年に比べ晴れの日が多い予報です。

育苗期管理のポイント

表1 育苗期後半管理のポイント

[ポイント]	[対 策]
①花芽分化を遅延させない	①寒冷紗で被覆することで、苗の温度を下げる。 被覆する時期 (株冷) : 株冷入庫前(3~5日前) (夜冷) : 処理期間中(但し、日中35℃以上の高温になる場合) (普通ポット) : 8月下旬から
②育苗期後半に窒素切れさせない	②窒素の効き具合を観察して、不足している場合はかん注や葉面散布によって追肥を行う。
③炭そ病、疫病の発生防止	③定期的な薬剤散布、発病株とその周辺株のほ場外への持ち出し。

育苗管理

【 作型 】

- ・ クラウン径10mm以上の充実した苗が目標。クラウン径が10mm未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。

表2 「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作型	入庫	出庫	定植予定日	陽光処理	収穫開始
株冷Ⅳ型	8月27日	9月15日	9月15日～	2回	11月中旬
株冷Ⅴ型	8月31日	9月19日	9月19日～	1回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	—	11月上～中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	—	11月中旬
普通ポット			9月20～25日	—	12月上～中旬
普通晩期(厳寒期安定出荷を目的)			9月26～28日	—	12月下旬

【 施肥 】

- ・ 根傷みしている場合は培土への追肥を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。
- ・ 作型に応じて最終追肥時期を決め、計画的に施肥を行う。

表3 液肥の最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
株冷Ⅳ型(8月27日入庫)	8月5日	8月10日
株冷Ⅴ型(8月31日入庫)	8月10日	8月18日
夜冷Ⅲ、Ⅳ型(8月中下旬処理開始)	処理10日前	処理5日前
普通ポット	8月30日	9月5日

※ポットが小型なほど、薄い濃度で間隔を短くし、肥料が切れすぎないようにする。

【 葉かぎ 】

- ・ 1回当たりの葉かぎの数は2枚以内とし、葉かぎ後の葉数は3.5枚程度となるようにする。
- ・ 葉かぎ作業直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う(傷口からの感染防止)。

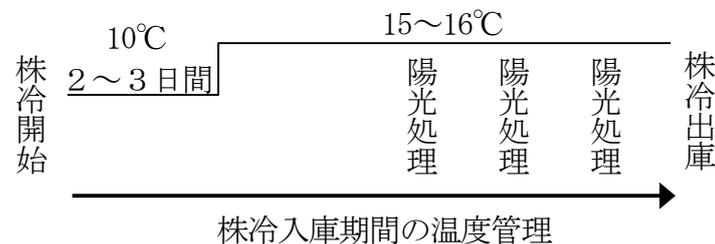
表4 最終葉かぎ時期の目安と葉数

作型	最終葉かぎ時期と葉かぎ後の葉数
株冷	入庫10日前に3~3.5枚
夜冷	処理開始5日前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3~3.5枚

【 低温処理 】

○ 株冷処理

- ・ 株冷処理の間に苗が消耗するため、充実した苗を使用する。
- ・ 株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が25～50ppmになるよう、肥培管理を行う。
- ・ 冷蔵庫内の湿度に注意し、湿度90%以上になるようにする。特に、冷風が直接当たる部分は乾きやすいので、ダンボールや厚紙で風よけをする。



○ 陽光処理

- ① 株の消耗を抑えるため、晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。入庫10日前後に1回目を行い、その後2～3日間隔で計2～3回行う。
- ② 出庫時間は1日8時間以内とし、乾燥しないようにかん水をし、株の温度が下がった夕方（午後6時頃）に再入庫する。（冷蔵庫内の温度上昇を防ぐため）

表5 株冷入庫10日前の体内窒素濃度による管理

体内窒素濃度	対 策
25ppm以下	葉面散布 2回：OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など
25～100ppm	葉面散布 1回：OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など
100～250ppm	かん水のみ
250～500ppm	PK剤の葉面散布 1～2回 入庫2～3日前に試験紙判定で100ppm以下になっているか再調査する
500ppm以上	遅い作型に変更する

○ 夜冷処理

- ・ 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時には150ppm程度の体内窒素を確保する。
- ・ 入庫時の庫内温度は13℃±2℃とする。
- ・ 入出庫時間の目安は、午前10時に出庫、午後6時に入庫とする。気温が高い場合、入庫が早いと庫内の温度が下がりにくいため、入庫時刻を遅くする。
- ・ 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行うが、摘葉はしない。

本田準備

例年、8月中旬以降の天候が安定しないため、早めに準備しましょう。

【 畝立て 】

- ・ 畝は、根が張るスペースを確保し排水性を高めるため、20～25cm程度に立てることが望ましい。
- ・ 耕うん時、ロータリーの爪に土が付かない程度の土壌水分状態で耕うんする。
- ・ 畝立て後はビニルのべた掛けを行う。

病虫害防除

- ・ 薬剤散布は、早朝もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時は薬害発生のリスクが高まる）。
- ・ 本田にハダニ類、うどんこ病、炭そ病を持ち込まないために、早期作型では低温処理直前（最終葉かぎ後）の防除を徹底する。うどんこ病・炭そ病の罹病株は入庫しない。

トピックス 「チビクロバネキノコバエに注意しましょう！」

育苗開始以降、チビクロバネキノコバエ幼虫による根傷み、活着不良が散見されます。また、症状がわからないまま有効な対策がとられていないほ場も見受けられます。下記の特徴を参考に、チビクロバネキノコバエの防除に取組みましょう。

(1) 形態・生態

成虫は体長 1.8～2.3mm (写真1)、幼虫は体が白色半透明で頭部が光沢のある黒色であり、老齢幼虫は体長約 4mm となる。(写真2) 成虫は堆肥等に誘引され、産卵する。孵化した幼虫は未熟な有機物をえさとし、それらに大量に発生した幼虫の一部がその後作物の地際部や地上部を加害する。



写真1. チビクロバネ
キノコバエの成虫

(2) 症状

- ・幼虫がクラウン部に寄生し、根を加害する。(写真5)
- ・初期の活着不良や苗の枯死を引き起こす。(写真3, 4)



写真2. チビクロバネ
キノコバエの幼虫

(3) 防除対策

- ・成虫は堆肥に誘引されるため、育苗ほ場近隣に未熟堆肥を置かない。
- ・薬剤による防除を徹底する。但し、本圃定植後はミツバチへの影響に注意する。

(4) 本田での発生

- ・ビニール被覆後に、花や果実が発生することがあるので注意する。



写真3. 被害株
(鉢上げから2週間)



写真4. 被害株
(鉢上げから2週間)



写真5. 根傷みの状況
(鉢上げから2週間)

出典：佐賀県農業技術防除センター

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！

～熱中症には十分に注意しましょう～

《熱中症対策》

- ・できるだけこまめに水分補給をする。(水よりもOS-1(経口補水液)の方がいい)
- ・できれば水分給水タイムを設定し、1時間に10分休憩をとる。
- ・アルミ付帽子を着用する。
- ・1人での作業はできるだけ控える。(定期的に異常がないか確認し合う)
- ・農作業をする場合は、冷水クーラーボックスを準備する。(飲料水等を入れておく)
- ・熱中症と思ったら、涼しい所で早めに休憩をとる。改善しない場合はすぐ病院へ。
- ・朝夕の涼しい時間帯に畝作りをする。
- ・寒冷紗被覆(パラソル使用)で作業をする。